

探 検 時 代

読売新聞大阪本社 河 野 節 夫

「関西大学の探検部の方からか電話です。」社の交換機の声を聞くと、さあ一またどこかへ行く話かな、と内心ワクワクしながら受話機を取る。

そんなわけで私が探検部の諸氏とのお付き合いもう長いことになる。そして現象させていたいたフィルムも多く、紙面にもたくさん秀れた写真を発表させていたいた。

さて、探検について何か書いてくださいといわれて、辞書をひいてみた……「危険を冒して実地探ること」と解釈されていた。ヨットで大洋を乗り切ること、未踏の山に、挑戦すること、から海外旅行までetc、etc。これ、すべて探検という日本字にあてはめてよいものだろうか？情報渦時代の今日、マスコミに騒がれて英雄扱いを受けた「探検の成功者」たら、私はその人たちは、その時「冒険の英雄」になってしまおうと思う。つまり探検の失格者となる。

そもそも人間は元来探検的な動物であり、自発的に探検衝動にかられる。幼ない時、未知への旅、想像の旅は誰もが経験することだ。つまり、人間とは、探検的意欲と冒険的エネルギーが渦巻いているといえる。

ここ数年、関西大学の探検部の諸氏は、地味で

あるが、本来の探検の精神にのっとり数々の快挙を成し遂げられた。それは若者の情熱と、技術と訓練のたまものだと思っている。

現代は「探検の大衆化時代だ」という人も多い。つまり現代人はそれぞれの立場と条件の中で探検を行なっているともいえよう。探検を「国家意識を越え、または忘却して、自然の中での人間回復を体験することが「現代の探検」ではないだろうか。そして若者に引き継がれてこそ、その意志ははぐくまれ、成長してゆく。冒険者となることは案外やさしい、つまり無事生きのびてさえしてくれば。だが探検者として生きてゆくということは、辞書のとおり実地を探ってきた本人だけのものであって、それが財産であるということをもっと知るべきではないだろうか。

資金の問題と組織論のからみあい、大学における探検部のあり方、行動についての悩みは多く、時代の流れとともに変化してゆくと思う。現役を離れ、OBとなって社会に出て、本当の探検部の思想が育って、実を結ぶのではないだろうか。つまり広い意味での人生というものに。好奇心とロマンを求めて……。

